

聖書:ダニエル書11章40節~12章4節

説教:終わりの時に

はじめに

ダニエルはバビロンという異国の地で信仰を守りながら歴代の王に仕えてきました。ときには王の命令に従わなかったということで告発され、獅子の穴に投げ込まれてしまうこともありました。それでも主に信頼し続けていきます。そんな彼も八十歳を超えて高齢になったとき危機がおとずれます。キュロス王がバビロンに住むユダヤ人が故国に帰ることを許すとおふれが出て、もはや長旅に耐えられる力はありません。加えて、愛する家族を失います。そんなことが重なり、気分が塞ぎ込み、信仰の土台が揺らぐような不安に襲われてしまうのです。そんなとき、主が幻の中に現れてくださり、御使いガブリエルの口を通して「終わりの日にあなたの民に起こることを」告げます。それは北の王と南の王が現れ、この二つの両大国にはさまれてイスラエルは大変な苦しみにあつていく。なんとも気が重くなる内容でした。

今日はその続きとなります。ダニエルがこれをごのように聞いていたのかはここには書かれていませんが、別の箇所を見ると、どうも納得したようなのです。それはなぜであつたのか。今日はその続きを見てまいります。

1 御使いミカエルが語ったこと

1) マカバイ戦争 (BC167~142年)

前回のおさらいとなるのですが、11章21節で登場する「一人の卑劣な王」とは、紀元前175年にセレウコス朝の王座に就いたアンティオコス4世・エピファネスで、非常に過酷な迫害をイスラエルの人々に行ったことで歴史に刻まれています。

もちろんイスラエルの人々が黙っていたわけではありません。32節で「自分の神を知る人たち」とか、35節で「賢明な者たち」と呼ばれる人たちが立ち上がり抵抗する。最初はゲリラ戦からはじまり、やがて祭司の家系に属するマカバイがリーダーとなって全面戦争に発展し、紀元前167年に今で言うマカバイ戦争ががはじまります。この戦いは、イスラエル国内の複雑な権力争い重なったことから142年まで続き、最終的にはイスラエルの勝利、そして独立で幕を閉じる。

2) アンティオコス4世・エピファネス (BC163年没)

では、アンティオコスはどうしたのか。イスラエルで反対闘争が激しくなっているとのお知らせを聞いたアンティオコスは、イスラエルに引き返して軍隊を指揮します。では40節にあることはその後起きたのでしょうか。「終わりの時に、南の王が彼と戦いを交える。北の王は戦車、騎兵、および大船団を率いて南の王を襲撃し、国々に侵入し、洪水のように通り過ぎる。」

これまで、南の王とはエジプトのことで、北の王とはアンティオコス4世のことだと言ってきましたので、40節によればアンティオコス4世はエジプトは再びと戦争をしたことになる。また41節にはこうある。「彼は麗しい国に攻め入り、多くの者が倒れる。しかし、エドムとモアブ、またアンモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。」

「麗しい国」とはイスラエルのことで、エドム、モアブ、アンモン人とは、イスラエルの周辺に住んでいた異国の民のことです。いずれにしても、41節を見ると、アンティオコスは再びイスラエルに攻め入ると読める。これは本当にあつたことなのか。実を言うと、アンティオコスは紀元前163年に急死して、エジプトと戦争はしていません。また、イスラエルに攻め入るところか、むしろ押し戻されてしまったというのが、歴史の事実です。そうしますと、御使いミカエルが語ったことは、39節までのことは確かにそのとおりにだったが、40節以降のことはそうならなかった。間違っていた、ということになるのか。

2 終わりの時

1) いつのことか

これをどう解釈するのか。40節に「終わりの時に」とあるのがヒントです。御使いは、終わりの時にペルシアは倒れ、アンティオコス4世が立ち上がり、イスラエルは迫害され、マカバイ戦争が起きると語りはしました。そうならないところもあつて、どうもすべて終わったわけではなさそうなのです。「終わりの日」とか「終わりの時」と言っていますが、終わっていない。歴史はいまでも続いています。おかしいですね。ミカエルは何を語ったのでしょうか。

2) 神殿の石が崩される

このことを考えるために、マタイの福音書24章を取り上げます。弟子たちが神殿を指さしながら、

すばらしい立派な建物だと感心しているのをご覧になったイエスは、「どの石も崩されずに、ほかの石の上に残ることは決してありません」（2節）と言われました。では、いつ石が崩されたのかと言えば、実際に紀元70年にローマ軍の手で神殿が破壊された。イエスはそのことを指して言ったのかなと思うわけです。

ところが話はそこで終わらない。このあと弟子たちはこう尋ねた。「お話してください。いつ、そのようなことが起こるのですか。あなたが来られ、世が終わる時のしるしは、どのようなものですか。」（3節）これに対してイエスはこう答えた。

3) 荒らす忌まわしいものが立つとき

14～16節。「御国のこの福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての民族に証しされ、それから終わりが来ます。それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす忌まわしいもの』が聖なる所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。」

イエスはダニエル書のことばを引用しながら、「終わりの時」についてこのように教えてくださいました。これはどう見ても、ローマ軍がエルサレム神殿を破壊することだけを指しているのではない。それとはまったく別で、もっと先のこの世界の終わりの時のことも語っている。近い未来と遠い未来、両方のことを語っている。これが聖書の語り方です。

そうしますと、今日の箇所はどうなるか。ミカエルが間違っただけを語ったのではない。近い未来のことに同時に、この世界の終わりの時のこと、両方語っている。

11年前、東北の沿岸を襲った津波の映像や、その後起きた原子力発電所の事故のニュースを見たり聞いたりしたとき、世界の終わりがきたのだろうかと一瞬思いました。しかし、聖書を読むとそうではない。世界の終わりを見分けるしるしがちゃんとある。その一つが41節。「彼は美しい国に攻め入る。」美しい国とはイスラエルを指します。現在のイスラエルを指すとは限りません。イエスは「荒らす忌まわしいものが聖なる所に立つ」これがしるしだと語りました。私たちの信仰を密接に関わる厳しい事態が、最後の時に起きるだろうと予想されます。

3 しかしその時

1) 多くの者が目を覚ます

これを聞いて、不安にならない人はいないでしょう。神を信じてよいのかと動揺するかもしれない。でも12章1節後半から2節にこうあるのです。「しかしその時、あなたの民で、あの書に記されている者はみな救われる。ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに。ある者は恥辱と、嫌悪に。」

苦難は避けられません。信仰を守ろうとして殉教する人も出るでしょう。でも私たちはやがてのとき、私たちには死という眠りから目を覚ます、すべての悪はさばかれて、義と公正が回復されていく。それが終わりの時だと言います。

いま教会では、お墓の石を建てようと業者にデザインをお願いしております。業者の方に伺ったら、今は墓じまいということでお墓を建てるよりも、壊して更地にするという仕事が増えていると言っていました。そんななかで教会はお墓を建てる。世の人々にはお墓はなんの希望もない場所に見えるでしょう。でも私たちには、お墓はよみがえりの場所となるのですから、これほど嬉しい場所はない。

なぜなら、3節にこうあるからです。「賢明な者たちは大空の輝きのように輝き、多くの者を義に導いた者は、代々限りなく、星のようになる。」

私は「賢明な者」ではないし、「多くの者を義に導いた者」でもない。だから私は星のようにはならない。そう思う方がたくさんいらっしゃるでしょう。でも、思い出していただきたい。イエスは目の見えない人たちのところへ行きました。今の世なら「生産性のない人たち」と言われて馬鹿にされ、生きる意味などないと言われてしまうような人たち。そんな人たちが救われた。そんな人たちが、「賢明な者」「義に導いた者」と言われ、彼らも星のようになっていくのです。だったら、誰も自分は違うと思う必要はないのではないのでしょうか。

2) 油注がれた方が断たれる

最後に一つだけ確認します。ダニエルは補囚となったユダヤ人が故国イスラエルに戻り、神殿が再建されることをずっと願い、晩年になってその願いがかないませんでした。ところが、その神殿がやがて破壊されていく、故国も再び大変な迫害にあつていくと聞かされる。普通ならがっかりです。ところがダニエルは、10章1節を見ると「彼はそのことばを理解し、その幻について悟った」とある。納得したと言うのです。なぜ納得したのでしょうか。ちゃんと理由がある。終わりの時に起こることを語る前

に、御使いはこう語っていたのを思いだしてください。9章25節。「油注がれた者、君主が来るまで七週。」そして26節。「その六十二週の後、油注がれた者は断たれ、彼には何も残らない。」

「油注がれた者」とは、救い主イエス・キリストのことです。救い主が来られ、救いの約束を語り、十字架で罪人を贖い、死からよみがえられていく。このようにして神のひとり子が救いの約束をしっかりと十字架で示してくださった。なのでこの先、迫害が起きても、横暴な支配者が来てもまったく揺るがされることがない。どんなに嵐が吹き回っても、十字架はしっかりと立っている。やがて帰るべき天の故郷は私たちの頭上に輝いている。その十字架のみもとに私たちは立ち戻りたいと願います。